



昭和音楽大学

幅広い視点で音楽を捉え、 多方面で活躍できる人材を育成

大学は、最終学歴となるような「学びのゴール」であると同時に、「働くことのスタート」の役割を求められ、変革を迫られている。キャリア教育、PBL・アクティブラーニングといった座学にとどまらない授業法、地域社会・産業社会、あるいは高校教育との連携・協働と、近年話題になっている大学改革の多くが、この文脈にあるといえるだろう。

この連載では、この「学ぶと働くをつなぐ」大学の位置づけに注目しながら、学長及び改革のキーパーソンへのインタビューを展開していく。各大学が活動の方向性を模索する中、様々な取り組み事例を積極的に紹介していきたい。

今回は、昭和音楽大学で、築瀬進学長と、GP・AP等を含むキャリア支援に携わってきた酒巻和子教授(短期大学部 音楽科長)、武濤京子教授(キャリアセンター長/音楽学部 音楽芸術運営学科)及び香月菜麻(学務部キャリア支援室室長代理)にお話をうかがった。



舞台を創る トータルとしての音楽

2016年度に就任した築瀬進学長は、「昭和音楽大学の歴史は、音大もしくは音楽そのものが置かれた社会的環境の変化に対応していくため、日々の改革を続けている」と語る。

今大きな社会環境の変化といえば、1つは女性の社会進出だという。女性の就業が当たり前になった結果、卒業後のキャリアをどう保証していくかということも、音大もメインの課題として取り組まざるをえなくなった。この背景の下、かなり意識的にキャリア支援の取り組みを進めてきたという。

音大生のキャリアといえはまず浮かぶのは音楽家・演奏家だ。しかし築瀬学長は、舞台を企画する人、広報・宣伝をする人、照明や音響スタッフ等がいて初めて成り立つトータルなものとして「音楽」を捉えたいという。この捉え方をすると、音大の教育の可能性を、キャリアの視点で積極的に拡大することができる。舞台に立つて

スポットライトを浴びる人だけでなく、陰で舞台を支える人材までを音楽教育の対象とする視野だ。例えば音楽芸術運営学科アートマネジメントコースの学生は、公立文化施設等の企画や運営職等で「音楽」を創る仕事に、舞台スタッフコースの学生は、照明や音響等のスタッフが主な進路となる。

つまり、昭和音楽大学のキャリア支援の取り組みには、後述のキャリアセンターやキャリア科目等と同時に、コースの拡大(学科再編)があるといえる。コースの数は2017年度に5つが新設されて21のコースとなる。

昭和音楽大学の建学の精神は「礼・節・技の人間教育」。築瀬学長は「礼・節・技というのは音楽の本質であると同時にキャリアの本質でもあるのではないか」と言う。

「例えば、『礼』はもちろん礼儀の礼ですが、音楽でいうと基本的なルール

が分かっていないと全く音楽を作れないことです。『節』というのはアンサンブルですね。節度をわきまえずに自分のことばかり主張するのは絶対ダメだと。だからアンサンブルをしっかりと学んだ学生は、社会に出て非常に協調性がある。それから、『技』を磨かないとみんなについていけないから、相当自分を追い込んで練習しないとダメだと。だからそういう意味で、克己心も相当強くなる。



築瀬進 学長

進路意識調査 ↓ 各年度に全学年で実施。実技担当やクラス担任と共有

進路決定状況調査 ↓ 卒業年次の学生に卒業後の進路を調査し教職員で情報共有

年度	キャリア科目				
	学部1年	短大1年	学部2年	短大2年	学部3,4年
2010年度	キャリア科目開講に向けて準備				
2011年度	音楽人基礎①開講 (全学必修科目)				
2012年度			音楽人基礎②開講 (学部:全学必修科目)(短大:選択科目)		
2013年度			音楽人研究開講 (学部・短大:選択科目)	フィールド・インターンシップ①開講 (選択科目)	
2014年度				フィールド・インターンシップ②開講 (選択科目)	
2015年度					
2016年度					
[大学における学び]のためにスタートアップを行い、主体的な学びにつなげる					
2017年度	基礎ゼミ開講 (全学必修)	キャリアデザイン設置 (選択科目、2018年度開講)	フィールド・インターンシップ①② (選択科目)		
	大学の学びに適応し 大学生生活の目標を持つ	将来の職業を意識し 自身のキャリアを考える	就業体験を行い、仕事に対し理解を 深め、実践的な力をつける		

キャリアセンター
(開設時キャリア支援センター)
2011年1月 開設

- ・ポートフォリオシステム運用開始
- ・キャリアカウンセラーの就任
- ・社会における音楽大学卒業生の「ニーズ調査」実施
- ・産業界の人材ニーズ調査実施
- ・卒業生の就業状況調査実施

全員面談開始(学部3年・短大1年)

学生のキャリア支援
に対し全学で取り組む
仕組みを構築

資格取得対策・音楽活動支援・就職支援対策等の講座や進学説明会・企業説明会等を開催

が分かっていないと全く音楽を作れないことです。『節』というのはアンサンブルですね。節度をわきまえずに自分のことばかり主張するのは絶対ダメだと。だからアンサンブルをしっかりと学んだ学生は、社会に出て非常に協調性がある。それから、『技』を磨かないとみんなについていけないから、相当自分を追い込んで練習しないとダメだと。だからそういう意味で、克己心も相当強くなる。

キャリアの観点で礼・節・技を見直していくと、音楽を究める者は、どの社会に行っても十分に通用するということに、見事につながる。これが、キャリアと本学の基本的な考え方の総括だと思います(築瀬学長)。

就業力、産業界ニーズの 両事業から 他大学の知見を得る

2009年度文部科学省「大学教育・学生支援推進事業(テーマ B:学生支援推進プログラム)」に「音楽大学の特性を生かしたキャリア支援体制の強化と充実」が採択されたことをきっかけ

に、「教職協働でキャリア支援を実施する体制を構築し、それまでに行っていた進路支援等の内容を質・量ともに拡充した」という(香月キャリア支援室長代理)。

取り組み内容は、音楽大学の学生が広く社会で活躍するために、「特性の伸長」「弱点の補完」「情報サービスの強化」「進路支援環境の充実」の4点を掲げて実施した。

次に、2010年度「大学生の就業力育成支援事業」に「キャリアマネジメント力を備えた音楽人育成」が採択された。2011年1月にキャリアセンター(当初の名称はキャリア支援センター)を設置し、専門教育と連動した体系的なキャリア教育を行っていった。

この事業で始まったキャリア関連科目「音楽人基礎①②」について武濤京子教授(音楽学部音楽芸術運営学科)は、「1年生、2年生…と、それぞれの段階で身につけてほしいことがあります」と言う。1年生ではまず、自分自身を振り返り、その価値を知るといった基本的なところ。2年生では、音楽

に絡んで他にどんな仕事があるのかなど、少し広く社会を知る。3年生になるとインターンシップも取り入れた授業。そういった段階的なキャリア教育カリキュラムになっている。

2012年度には「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に、関東山梨地域大学グループとして採択され、多彩な強みを持つ14大学が大学の枠を超え、産業界のニーズを大学教育に取り入れることに挑んだ。武濤教授は「連携大学は、就業力育成事業に採択された大学だったので、お互いの取り組みを知ることは大変勉強になりました」と振り返る。

実はこの「産業界ニーズ～」では、昭和音楽大学と、昭和音楽大学短期大学部が、14大学のうちの2大学という形で参加した。短期大学部(音楽科長)の酒巻和子教授は、「短大と大学で違う点もありましたし、連携大学は、国立・私立が混ざり、理系もあれば福祉系もありと様々でしたが、どんな職業に就いても社会で活躍するために何が必要かをグループ全体の共通課

題として考えることができました」と語る。合同FDの授業見学も有意義だったという。



音楽大学ならではの 悩みと強み

「産業界ニーズ事業で他大学を訪れて一番感じたのは、他の一般大学といわれるところは、卒業したら就職するものだ、多くの学生達が考えているということでした」と酒巻教授は言う。

築瀬学長は「音楽大学に入学する学生は、自分の音楽で高みを目指したいのですよ。みんな舞台上に行きたい」と指摘する。早期からキャリアを考えさせようと、1年生や2年生で「プロはとても無理だからバックアップする側に行きなさい」「一般企業への就職を目指しなさい」等と頭ごなしに言えば、かなり精神的ショックを受ける学生もいることは想像に難くない。

器楽・声楽等の実技系のコースと、アートマネジメント等の音楽を支えるコースでは志向性が違い、実技系の学生は、時間が許す限り自分の演奏技術の研鑽に努めたいと考える。卒業間際になっても将来の方向性が固まらず支援が必要になる場合もある。大学側としても支援しにくい面がありそうだが、武濤教授は「多様なニーズに対応して、学生自身が気づいた時に、手を伸ばせば支援や情報なりがあるというふうにしたいと思っています」と言う。大学・短大あわせて1学年400名弱という小規模な大学だからできるという面もありそうだが、二

人の教授は「学生一人ひとりが浮き出て見える」「そこに対応するという意味では、一般大学とはちょっと違う」と言う。

一方でここ数年、自立したい、自立は必要だという意識が学生の間にも広がっている。「音楽だけで生計を立てるのは難しいが、アルバイトや拘束されない仕事に就いて、演奏活動を継続していきたい」という志向の学生が、実技系のコースを中心に多いが、昨今「社会的経済的に自立し、その中でできる範囲で好きなこと(音楽)を精一杯やる」というキャリア観を持つ学生が少しずつ増えてきたという。

演奏家やアーティストの夢を追ってキャリア構築のスタートが遅れがちなのは音大生の弱みかもしれないが、逆に強みもある。築瀬学長は、音大生の強みを「まず豊かな感性と表現力です。また、個人レッスンを通じて礼儀を身に付けていますし、とにかく“出来るまでコツコツやる”という努力も“出来たときの喜び”も知っています」と言う。

築瀬学長は「一般大学の学生と比べても、社会に出た際の競争力は相当高いレベルだと思うのです。高い協調性を持っていたり、自己アピール力があったり、自己管理能力もあれば、目的意識も高いものを持っている」と言い、学生本人がそれに気づいていないために強みを生かせていないとも言う。



音楽教養コース新設と 基礎ゼミの導入

2017年度、大学に4つ、短大に1つのコースが新設される。そのうち特

に「学ぶと働くをつなぐ」に関連するのが、今まで短大にだけあった「音楽教養コース」の大学への新設だ。

音楽が大好きで、将来は演奏家以外の形で音楽に関わりたい学生が、実技も学びながら、音楽を生かして「何かがしたい」という思いから、興味があるものに触れることのできる、選択肢がとて広いコースだという。「ここを出たら、汎用的能力も高く、音楽の知識も豊富で、音大卒としてどこへ出しても恥ずかしくないコースということを見ていて、カリキュラムもそれなりに複雑ですけれども、楽しいコースです」(酒巻教授)

「就業力育成支援事業」で始まった「音楽人基礎①」のリニューアルも行われる。科目名が「基礎ゼミ」と変わり、大学・短大ともに1年生の全学必修になる。「音楽人基礎①」の内容に、汎用的能力を身につける「総合教養」科目の内容、さらに新入生オリエンテーションも加えて、「初年次教育として本学で学ぶ意味から、自分を見つめるということ、そしてキャリアにつなげるところまで。かなり欲張った科目になっています」と酒巻教授。

築瀬学長は「社会の様々な分野で活躍している卒業生情報の収集と活用度アップが今後の課題と考えている。データベースで探すことが出来るような仕組みにはなっていない。本学の資産と言えものを見える化し、有効活用できる取り組みができれば、新しいキャリア支援の形につながっていくと思います」と話す。



(角方正幸 リアセックキャリア総合研究所 所長)